

日本におけるジョージ・ヘンリー・ルイス文献書誌

A Bibliography of George Henry Lewes: Translations, Books, and Periodicals Published in Japan

大嶋 浩*
OSHIMA Hiroshi

This bibliography covers material related to George Henry Lewes that was published in Japan—Japanese translations of his works as well as books, newspapers and periodicals containing references to George Henry Lewes. The entries are divided according to the different categories and the year of publication, and are presented in chronological order. The bibliography comprises the following categories:

1. Japanese Translations of George Henry Lewes's Works
2. Books with Any References to George Henry Lewes
 - 2.1. Japanese Books and Others
 - 2.2. Japanese Translations
3. Newsletters and Periodicals with Any References to George Henry Lewes

The first category (1.) and the former part of the second category (2.1.) appear in the present issue; the latter part of the second category (2.2.) and the third category (3.) will be added in the next issue.

This is not a complete bibliography of references to George Henry Lewes in Japan. I apologize for any inadvertent omissions and hope that further research will provide a comprehensive bibliography.

キーワード：書誌、ジョージ・ヘンリー・ルイス、日本

Key words：bibliography, George Henry Lewes, Japan

I はじめに

ジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lewes, 1817-78) は作家、文芸批評家、定期刊行物の編集者、哲学者、自然科学者として多方面な活動をした人物であったが、文学史上では、『ゲーテ伝』(*The Life and Works of Goethe* [1855]) の作者として、また、著名な女流作家ジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) の内縁の夫として有名である。日本におけるジョージ・エリオット文献書誌を調査する過程で入手した文献資料のなかに、ルイスへの言及がみられるものがかなりあることが判明し、それらの資料を中心に整理したのが本書誌である。その意味では、本書誌は、現在調査中の日本におけるジョージ・エリオット文献書誌の副産物として作成されたものであり、きわめて不十分なものと言わざるをえない。しかしながら、これまで日本におけるルイスの文献書誌は作成されたことがなく、現在まで調査できたものを発表しておくことは、今後の更なる調査・研究に資するものと言えよう。

本書誌は、以下の項目からなる：

- (1) ルイスの著作の翻訳関係
- (2) 研究書・概説書関係
 - (i) 和書等
 - (ii) 翻訳書
- (3) 会報・雑誌関係

各項目は年代順に整理している。ただし、連載ものに関しては、初出を基準として一括して整理し、その細目は破線 (----) で区切って明示している。

原則としてできるだけ発表当時の表記に準じ、旧字体を用いているが、一部新字体を採用したところもある。

掲載頁数の関係上、本稿では上記の項目のうち、(1) 及び(2)の(i)を掲載し、(2)の(ii)及び(3)は次号に掲載する予定である。

すでに述べたように、本書誌は調査の不十分な中間報告的なものであるが、本書誌において特に注目すべき書

*兵庫教育大学 (社会・言語教育学系)

誌的事項として以下の3点を指摘しておく：

(i) 現在確認できているところでは、ルイスへの言及が見出される最も古い文献は、『女學雑誌』第109号(1888 [明治21] 年5月12日)に掲載された、平野はま子による「ジョージ・エリオット女史小傳」である。また、ルイスへの言及が見出される初期の文献のうち、比較的詳細で長い言及がなされているものとして注目に値するのは、榎月 [戸川秋骨] の「英國騷壇の女傑 ジョージ・エリオット」である。これは秋骨が『文學界』第3号(1893 [明治26] 年3月31日)に発表した文章で、その内容は「仏のシェーレルのエリオット論によったもの」²⁾とされている。

(ii) ルイスの著作の翻訳書と言えるものは、1906(明治39)年に長谷川誠也訳で出版された『文學訓』(博文館)が、現在確認されている唯一のものである。これはルイスの "The Principles of Success in Literature" の抄訳である。この翻訳書には、附録として、「詩とは何ぞや」が収められている。この附録は、ルイスの「藝術の生命」(p.338)の抄訳であり、そのタイトルから明らかのように、その原著は "The Inner Life of Art" である³⁾。これらのルイスの文学論の原著を夏目漱石もその蔵書の一つとして所有していたことが知られている。漱石の

『文学論』(1907)においてルイスへの言及は一箇所認められるだけであるが⁴⁾、漱石のその蔵書には、漱石自身による、かなり多くの書き込みがなされており、また、漱石の「ノート」には、"The Inner Life of Art" からの抜粋が3つ認められる⁵⁾。漱石はルイスの文学論を熱心に読んでいたと言ってよいであろう。

このように、ルイスの文学論がいちはやく明治期の日本において翻訳・紹介されていることを考えると、日本におけるルイスの文学論の受容に関しては、今後更に調査する価値があると言えよう。

(iii) 『文學訓』には、訳者による解説文が添えられている。その中でルイスの生涯が簡単にではあるが紹介されている。現在までに調査できた文献資料の中では、ルイスの生涯をかなりまとまった形で紹介した、日本における最初の文献として位置づけられるものである。

本書誌をより完全なものにするために、情報等をお寄せいただければ幸いである。本書誌を作成するにあたっては、文献資料の調査・収集等において兵庫教育大学附属図書館の学術情報チームには特にお世話になった。ここに記して感謝する。

II ジョージ・ヘンリー・ルイス書誌

1 ルイスの著作の翻訳関係 (ルイスの著作 [書簡類も含む] の一節を訳したのものに関しては主要なもののみ収録)

発行年月日	著者名・ 訳者名等	タイトル等	雑誌名、書名等	発行所、頁等	備 考
1906.05.06 明治 39	長谷川誠也 訳		文學訓	博文館, 340 pp.	表紙の記載は、長谷川天溪著、文學訓、東京博文館蔵版；「譯者の序」によれば、「本書は英国文壇の一異彩たりし故リューキス氏の著 "Some Principles of Success in Literature" ^[ママ] の抄譯也。……書名を譯せば『文學上に於ける成功の二三原理』とすべし。」；本文の第一頁の冒頭には、「文學訓、ジー・リューキス原著、長谷川天溪譯述」という記述；巻末に「附録 詩とは何ぞや」(「藝術の生命」[<i>British and Foreign Review</i> , 13.26 (March 12, 1842): 1-49]に掲載の "Philosophy of Art: Hegel's Aesthetics" の最初の40頁が、 <i>The Principles of Success in Literature</i> , ed. T. S. Knowlson [1898] の中に "The Inner Life of Art" と題して再録されたもの]の抄訳)が収録されている
1938.08.05 昭和 13	豊田 實		ジョージ・エリオット	研究社、英米文學 評傳叢書 53, pp.52, 55-56.	日誌及び <i>Biographical History of Philosophy</i> の部分訳；復刻版(研究社, 1980.06.30)
1966.02.20 昭和 41	和知誠之助		ジョージ・エリオット の小説	南雲堂, pp.12, 14, 17, 26, 44n5, 46, 47, 50, 52-53, 70, 150, 205n2.	ルイスの手紙の要旨ないし部分訳、 <i>Lewis's History of Philosophy</i> の部分訳；改装版(1974.10.20)
1977.01.15 昭和 52	富士川和男		ジョージ・エリオット 文学の倫理性	大盛堂書房, pp.25, 146.	ルイスの手紙 (<i>GEL</i> , II, 269; III, 420) の部分訳

日本におけるジョージ・ヘンリー・ルイス文献書誌

1980.06.20	昭和55	川本静子		G・エリオット—他者との絆を求めて	冬樹社, 英米文学作家論叢書 7, pp.91, 95-96.	ルイスの手紙 (GEL, III, 106; III, 320) の部分訳
1981.07.30	昭和56	岡地 嶺 訳編	49 ジョージ・ヘンリー・ルイス	イギリス詩論集 (下)	中央大学出版部, pp.473-82.	「芸術の内的生命」の抄訳 (「芸術の〔内的〕生命」については長谷川誠也訳『文学訓』(1906.05.06)の「備考」を参照)
1984.12.10	昭和59	榎本みな子	オースティンからジョージ・エリオットへ	オースティンの小説とその周辺	英宝社, pp.235-59.	「カラー・ベルの『シャーリー』」(『エディンバラ評論』[1850.01]), 「芸術におけるリアリズム・最近のドイツ小説」(『ウエストミンスター評論』[1858.10.]), 『ゲーテの生涯とその作品』, 「ジェイン・オースティンの小説」(『ブラックウッズ・マガジン』[1856.07.]), 「『トム・ジョンズ』短評」(『ブラックウッズ・マガジン』[1860.03.]), 「文学における成功の法則」(『フォートナイトリー評論』[1865]), ディッケンズ論 ("Dickens in Relation to Criticism," <i>Fortnightly Review</i> XVII [1872]) の部分訳
1995.11.20	平成7	藤井元子		歴史と文学—ジョージ・エリオットの小説—	近代文藝社, pp.25-26, 44.	ルイスの手紙の部分訳
1998.04.25	平成10	富山太佳夫 越智博美		ユダヤ人の商人シャイロック	青土社, p.154.	『俳優と演技の技芸』の部分訳
1998.05.20	平成10	渡辺ちあき, 松井優子		ジリアン・ピア著『ダーウィンの衝撃』	工作舎, pp.40-41, 212-13, 256.	"Mr. Darwin's Hypotheses," <i>Fortnightly Review</i> 16 (1868) の一節, 『動物の研究』(1862) の一節および『生命と精神の問題』の一節, の部分訳
1999.09.27	平成11	亀井秀雄		「小説論」: 「小説神髓」と近代	岩波書店, pp.117-18.	ルイスの小説作法論『文学で成功する方法』(1865) の部分訳
2001.04.21	平成13	足立万寿子		エリザベス・ギャスケル—その生涯と作品	音羽書房鶴見書店, pp.223-24.	1857年4月15日付けのルイスからギャスケル宛ての手紙の抄訳
2003.09.30	平成15	渡辺千枝子		渡辺千枝子著『ジョージ・エリオットとドイツ文学・哲学』	創英社/三省堂書店, pp.64-65, 66-72.	『ウェストミンスター・レビュー』(1857年10月)の "Belles Letters and Art" でのケラーに関する論評および『ウェストミンスター・レビュー』(1858年10月)の "Art. VI. Realism in Art; Recent German Fiction" と題された論評の部分訳
2004.03.10	平成16	天野みゆき		ジョージ・エリオットと言語・イメージ・対話	南雲堂, pp.55, 77, 208, 301, 302, 303-04, 306-08, 309, 312-13, 324-26, 401.	ルイスの手紙 (GEL, II, 269; II, 429, 506, III, 83) の要旨ないし部分訳 (p.55); 『哲学の歴史』, "Auguste Comte," 「文学で成功するための法則」, 『ゲーテの生涯と作品』, "Goethe as a Man of Science," 『生理学』, 『生命と精神の諸問題』の要旨ないし部分訳
2005.03.30	平成17	原 公章	『ミドルマーチ』における「心筋縮小」と「心筋拡張」	日本大学イギリス小説研究会編, 『イギリス小説の探究: Explorations』	大阪教育図書, pp.1-21.	『ゲーテ伝』の部分訳 (p.8)

2 研究書・概説書関係

2-1 和書等 (主に単著を収録)

発行年月日	著者名・ 訳者名等	タイトル等	雑誌名, 書名等	発行所, 頁等	備 考
1891.11.17	明治24	澁江 保	英國文學史 全	博文館, p.214.	「史家傳記家」として「ジョージ・ヘンリー・ルイス」の名前が挙げられている; 表紙には「澁江保著」, 題扉には「澁江保編」奥付は「著者 澁江保」の表記

1901.06.02	明治 34	坪内雄蔵		英文學史	東京専門學校出版部, pp.799-800.	
1902.02.10	明治 35	坪内雄蔵		英文學史 (再版)	東京専門學校出版部, pp.805-06.	ルイスに関する記述は初版と同一内容
1906.02.10	明治 39	宮崎湖處子	女作家オーステン嬢	湖處子文集	鹿鳴社, pp.117-33; ルイスのオースティン 賛美 に 言 及 (p.128)	初出は『婦人畫報』臨時増刊貴婦人, 第一卷第五號 (1905.10.15)
1907.05.07	明治 40	夏目金之助		文學論	大倉書房, p.647.	記載は復刻版 (名著復刻全集編集委員会編『文學論』[日本近代文学館, 1975.11.15]) に基づく
1908. 11.22	明治 41		「エリオット (Eliot) 中の「四 (George E.)」	日本百科大辭典 第一卷	三省堂書店, pp. 1243-44; ルイスへの言及はp.1243.	「ウォーリック州のグリッフに生る」, 「ジョージ, リュエスと相知り, 一八五四年これと結婚」という不正確な記述
1910.04.01	明治 43	松本雲舟	緒言	ジオルヂ・エリオット作, 『アダム・ビキド』, 松本雲舟譯	警醒社, pp.1-15; ルイスへの言及は pp.3, 5, 7, 9, 13.	
1925.01.20	大正 14	木村毅		小説研究十六講	新潮社, p.180.	
1928.03.31	昭和 3	馬場弧蝶	序文	「世界名作大観; 英国編 第13巻」の『チャンス 下巻 附サイラス・マアナア』	国民文庫刊行會, pp.1-4; ルイスへの言及はpp.2, 3.	「チャンス 下巻 目次」(p.1), 「チャンス 下巻」(ジョゼフ・コンラッド著, 平田禎木譯, pp.1-307), 「序文」(馬場弧蝶 [著], pp.1-4), 「サイラス・マアナア 目次」(pp. 1-2), 「サイラス・マアナア (レエヴロオの織匠)」(英國ジョージ・エリオット作, 馬場弧蝶譯, pp.1-315); 記載は再版 (1928.04.05) による
1931.01.10	昭和 6	豊田 実	CHAPTER XI George Henry Lewes: His Personal and Intellectual Relation to George Eliot, and His Exposition of Comte's System of Thought	<i>Studies in the Mental Development of George Eliot in Relation to the Science, Philosophy, and Theology of Her Day</i>	研究社, pp.184-206.	
1931.12.01	昭和 6	三省堂百科辭書編輯部 編纂	「エリオット (Eliot) 中の「ロ (George E.)」	圖解 現代百科辭典 第一卷	三省堂, p.331.	
1933.04.10	昭和 8	木村毅		小説研究十二講	新潮社, p.111.	『小説研究十六講』(1925.01.20) の縮刷改版 (「序」p.2)
1934.09.26	昭和 9	Lafcadio Hearn (小泉八雲)	CHAPTER III STUDIES IN SWINBURNE	On Poets (『詩人論』)	北星堂書店, pp.97-44; ルイスへの言及はp.104.	
1938.08.05	昭和 13	豊田 實	VII. 結婚の実現	ジョージ・エリオット	研究社, 英米文學評傳叢書 53, pp.52-60; 他に pp.32-33, 44, 45, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 75, 76, 77, 81, 82, 86, 87, 88, 95, 98, 104, 106, 109, 110, 111, 118でもルイスに言及	
1939.01.15	昭和 14	飯田敏雄	「第十一章 十九世紀後半, ヴィクトリア朝の文學」中の「三 ディケンズ, サッカレイ, 及びその他の小説家」における「ジョージ・エリオット」の項	イギリス文學全史	大觀堂書店, pp. 298-301; ルイスへの言及はp.298.	

日本におけるジョージ・ヘンリー・ルイス文献書誌

1942.03.15	昭和 17	大和資雄	「第六章 ヴィクトリア朝の英文学」の中の「一、ヴィクトリア朝前期」における「3. 小説」	英文学の話	健文社, pp.285-303 ; ルイスへの言及はp.299.	
1947.05.15	昭和 22	土井 治	解説	G・エリオット, 『サイラス・マーナー』(土井 治 譯)	新月社, 英米名著叢書, pp.366-81 ; ルイスへの言及はpp.368-70.	
1948.10.20	昭和 23	高橋健二		ゲーテと女性	郁文堂書店, p.5.	ルイス『ゲーテ傳』の一節からの引用あり:「若いゲーテが食堂には行って行くと、食事をしていたお客たちが、ナイフとフォークを置いてアポロのような彼に目をみはった。」(p.5)
1950.06.30	昭和 25	海老池俊治	エリオット ジョージ George Eliot (一八一九~八〇)	世界文学辞典	河出書房, pp.62-64;ルイスへの言及はpp.63, 64.	
1951.05.15	昭和 26	福原麟太郎	「英文学百選」の中の「66. George Eliot: <i>Silas Marner</i> 土井治 (新月社)」	英文学入門	河出書房, 市民文庫26, p.200.	
1951.11.15	昭和 26	福原麟太郎		英文学	朝日新聞社, p.268.	『福原麟太郎著作集 12: 英文学の歴史』(1969.10.25)と同一内容
1951.11.15	昭和 26	大和資雄		英文学の歴史	河出書房, 市民文庫93, p.214.	
1953.03.01	昭和 28		「エリオット (Eliot)」の中の「ロ [George E.]」	新百科辞典	三省堂出版株式会社, p.178.	
1954.04.10	昭和 29		エリオット, G.	編者代表 福原麟太郎『英語・英米文学講座 第9巻 簡約英米文学概辞典』	河出書房, p.61.	
1954.07.01	昭和 29	佐瀬順夫	「VII. Victoria朝」の中の「ii 小説」における「Dickens, Thackerayなど」の項の中の「(c) George Eliot (1819-80)」	英文学史要	関書院, pp.126-28 ; ルイスへの言及はp.127.	
1956.07.01	昭和 31	海老池俊治	三, ジョージ・エリオット一知性と情感	十九世紀の小説	研究社, 研究社選書, pp.120-81ルイスへの言及はpp.128-29, 131-32, 163, 174-75.	記載は再版(1959.06.209)による
1956.10.16	昭和 31	岩波書店編集部編	ルイス Lewes, George Henry 1817. 4.18-78.11.28	岩波西洋人名辞典	岩波書店, p.1668.	『岩波西洋人名辞典増補版』(1981.12.10)も同一内容
1957.01.20	昭和 32	海老池俊治	「第58表(1876-1880)」の中の「イギリス 写実小説(3)」	市古貞治等監修『解説世界文学史年表』	中央公論社, pp.440-41 (エリオットとメレディスの解説);ルイスへの言及はp.440.	
1957.08.20	昭和 32		サイラス・マーナ	毎日新聞社図書編集部編『増補 世界の名著』増補第3版	毎日新聞社, 毎日ライブラリー, pp.181-83 ; ルイスへの言及はp.182.	初版は1955(昭和30)年;初版は未確認

1958.02.10	昭和33	海老池俊治		ヴィクトリア時代の小説—社会史的背景を考慮して—	南雲堂, pp.78, 81, 109.	
1958.03.25	昭和33	C. H. Herford 著, 大和資雄編		<i>A History of English Literature</i> (『英文学小史』)	大阪教育図書, p.162.	巻末の「英文学史年表」の中で, ルイスの没年に言及
1959.12.25	昭和34	川副国基	「小説神髓」について—文学革新期と英国の評論雑誌—	近大日本文学論	早稲田大学出版部, pp.1-16; ルイスへの言及はpp.6, 12.	「『小説神髓』について—文学革新期と英国の評論雑誌—」の初出は, 『文学』1959年1月号(1959.01.10)掲載の「文学革新と英国の評論雑誌」
1961.04.20	昭和35	鍋島能弘		イギリス文学史大系 IV 19世紀	東京大学出版会, pp.156, 167.	「文学論 theory of literature に関するもの」(pp.155-157)の中でルイスの『文筆達成の原理』 <i>The Principles of Success in Literature</i> (1865)に言及; 「(5)テクニークの自覚」(pp.167-68)の中で, 上記の本の第5章と第6章に言及
1961.03.23	昭和36	D. Miles and R. 著, 郡山直編	"George Eliot (1819-1880)"	<i>A History of English Literature</i> (マイルズ: 英文学史)	北星堂書店, pp.227-29, 356n; ルイスへの言及はp.228; 記載は第9版(1967.04.20)に基づく	
1962.01.07	昭和37	野町 二, 岡本通編著		英米文学ハンドブック	開文社, p.242.	「CHRONOLOGICAL TABLE」の「1878」の項で, 「George Henry Lewes 死す」の記述; 増補改訂版でも同一の記載(「増補改訂版の序」は1969年9月の記載となっているが, 増補改訂版の正確な発行日は不明。増補訂正版に関しては1971年4月1日発行のもの[奥付の記載では第六刷]を参照した; 増補三訂版(1987.03.20)を見よ
1962.07.12	昭和37	内村鑑三	「宗教と文学」の中の「第二章 ダンテとゲーテ」	内村鑑三信仰著全集 5	教文館, pp.42-57; ルイスへの言及はp.45.	「しかして彼の伝記の最も善美なるは, ルイスの『ゲーテ伝』とす。」(p.45)
1962.09.01	昭和37	佐瀬順夫	「VII. Victoria 朝(1832-1900)」の中の「iii 小説」における「(e) George Eliot (1819-80)」	要説英文学史	英宝社, pp.137-39; ルイスへの言及はp.138.	『英文學史要』(1954.07.01)とほぼ同一内容
1963.06.20	昭和38		サイラス・マーナ	毎日新聞社編『世界の名著』(新装版)	毎日新聞社, pp.160-61; ルイスへの言及はp.161.	増補第三版(1957.03.20)と同一内容
1964.04.30	昭和39			中西信太郎編『英米文学ハンドブック』(改訂初版)	創元社, 「ジョージ・エリオット」の項(p.161)のなかでルイスへの言及あり	改訂3版(1968.04.30)も同一内容; 初版(1952.08.01)は未確認
1965.02.01	昭和40	田辺昌美		ジェイン・オースティンの文学	あぼろん社, p.14.	ルイスのオースティン評に言及
1966.02.20	昭和41	和知誠之助		ジョージ・エリオットの小説	南雲堂, pp.12, 13, 14, 17, 26, 26n1, 37, 38-39, 41-43, 44n5, 46, 47, 50, 52-53, 70, 88, 91, 99, 112-14, 116, 124, 125n2, 129n1, 131, 132n1, 148-49, 150-52, 157, 173n1, 183n6, 205, 205n1.	改装版(1974.10.20)
1966.08.23	昭和41	夏目漱石		漱石全集 第九巻 文學論(特装版)	岩波書店, pp.502, 654n五〇二・12.	

日本におけるジョージ・ヘンリー・ルイス文献書誌

1966.04.28	昭和42	夏目漱石	「短評並に雑感」の中の「G. H. Lewes: The Principles of Success in Literature (London: W. Scott. "Scott Library")」	漱石全集 第十六巻 別冊 (特装版)	岩波書店, pp.250-52.	"The Principles of Success in Literature" 及び "The Inner Life of Art" への書き込み
1966.04.28	昭和42	夏目漱石	人工的感興	漱石全集 第十六巻 別冊 (特装版)	岩波書店, p.526.	
1966.04.28	昭和42	夏目漱石	「漱石山房蔵書目録」の中の「Lewes (G. H.)」	漱石全集 第十六巻 別冊 (特装版)	岩波書店, p.4 [p.829].	<i>The Principles of Success in Literature</i> (Scott Library)
1966.11.10	昭和41	古谷専三		ジョージ・エリオット研究	吾妻書房, pp.18, 22, 23.	
1968.05.20	昭和43	小池 滋	エリオット George Eliot (一八一九-八〇)	大日本百科事典 ジャポニカ 3	小学館, pp.506-07; ルイスへの言及は p.507.	記載は新版 (1981.04.20) に基づく
1968.06.29	昭和43	榎本みな子	Jane Austen から George Eliot へー G. H. Lewes の Austen 論を中心としてー	清水勇教授退職記念論集	清水勇教授退職記念会 (代表 小川三郎 [愛知県立大学英文学研究室]), pp.91-107.	「ジェイン・オースティンとジョージ・エリオットとつを結びつける媒介としてジョージ・ヘンリー・ルイスのオースティン論を中心として見られる彼の小説観と, その特質, またその小説完から考えられる二, 三の問題とジョージ・エリオットの小説との関係を考察」(pp.236-37) したもの
1969.10.25	昭和44	福原麟太郎		福原麟太郎著作集 12: 英文学の歴史	研究社, p.441.	『アダム・ビード』, 『サイラス・マーナー』, 『ミドルマーチ』に言及; 『英文学』(朝日新聞社, 1951.11.15) と同一内容
1970.02.20	昭和45	清水幾太郎	「コントとスペンサー」の中の「スペンサーのコント観」	世界の名著 36 コント スペンサー	中央公論社, pp.42-44; ルイスへの言及はp.42	
1971.04.10	昭和46		ルイス George Henry Lewes 1817-78」	哲学事典	平凡社, p.1488.	
1972.03.01	昭和47	佐瀬順夫	「VII. Victoria 朝 (1832-1900)」の中の「iii 小説」における「(e) George Eliot (1819-80)」	要説イギリス文学史 (新版)	英宝社, pp.137-39; ルイスへの言及は p.138.	初版『要説英文学史』(1962. 09.01)
1973.10.01	昭和48	近藤いね子		近藤いね子編『小説と社会』	研究社, p.84; 記載は再版 (1977. 09.20) に基づく	
1975.03.15	昭和50	藤田清次		ジョージ・エリオットの小説ー 分析と再評価ー	北星堂書店, pp.11, 29, 141, 150, 162, 163, 187-88, 225, 241, 243, 244, 253.	
1976.04.30	昭和51	古谷専三		ジョージ・エリオット論考	千城, pp.163-66, 169.	
1976.05.31	昭和51	夏目漱石		村岡勇編『漱石資料ー文学論ノート』	岩波書店, pp.53, 76, 316, 412.	<i>The Principles of Success in Literature</i> (『漱石全集 第21巻』 [岩波書店, 1997.06.27] 722によれば, 漱石山房蔵書にある Scott Library版) の中の "The Inner Life of Art" に言及; p.76の "Jonffroy" の表記は正しくは "Jouffroy" (『漱石全集 第21巻』 [岩波書店, 1997.06.27], p.239 では "Jouffroy" の表記)
1976.07.30	昭和51		サイラス・マーナ	毎日新聞社編『世界の名著』新装版	毎日新聞社, pp.160-61; ルイスへの言及はp.161.	増補第三版 (1957.03.20) と同一内容

1977.01.15	昭和52	富士川和男		ジョージ・エリオット文学の倫理性	大盛堂書房, pp. 22-25, 25-26, 37, 38, 47.	
1977.10.01	昭和52	田辺昌美		改訂 ジェイン・オースティンの文学	あぼろん社, pp. 14.	
1977.11.20	昭和52	昭和女子大学近代文学研究室	長谷川天溪	近代文学研究叢書代四十六巻	昭和女子大学近代文化研究所, pp. 263-353; ルイスへの言及はpp.269-70, 281.	
1978.09.18	昭和53	山脇百合子		英国女流作家論	北星堂書店, pp. 72, 97, 99.	
1979.03.31	昭和54	巽 豊彦	坪内逍遙とジョージ・エリオット—『小説神髓』を中心に—	高柳俊一編『受容の軌跡 — 西欧思潮と近代日本』	南窓社, pp.133-51; ルイスへの言及はp.149.	
1979.04.10	昭和54	大竹 勝	第二章 ジョージ・エリオット	イギリス文学新研究	評論社, pp.39-65; ルイスへの言及はpp.41, 42, 48.	
1980.02.10	昭和55	和知誠之助	シャーロット・ブロンテの「詩」と「真実」—G. H. ルイスとの論争—	和知誠之助編『女性と英米文学』	研究社, pp.143-56.	
1980.06.20	昭和55	川本静子		G・エリオット—他者との絆を求めて(英米文学作家論叢書 7)	冬樹社, pp.5-17, 31, 32, 44-48, 52, 59, 91 104, 113-16, 189, 217, 237-39.	
1980.07.31	昭和55	木村 毅	「第九講 背景の進化とその哲学的意義」の中の「(一七) エリオットの現実的背景」	小説研究十六講	恒文社, p.168.	新装版(初版は1925.01.20); なお, 表記が新かな, 新漢字等にあらためられ, 新たに「序」の前に, 松本清張による「葉脈の人—木村毅と私」(pp.1-4) が掲載されている
1981.12.10	昭和56	岩波書店編集部編	ルイス Lewes, George Henry	岩波西洋人名辞典増補版		『岩波西洋人名辞典』(1956.10.16) と同一内容
1983.05.20	昭和58	鷺見八重子	「序」の中の「4 ジョージ・エリオット」	鷺見八重子・岡村直美編『イギリス小説の女性たち』	勁草書房, pp.14-16; ルイスへの言及はp.14; 同書p.113においてもルイスへの言及あり	
1984.12.05	昭和59	川本静子	四 ジョージ・エリオット—文化の危機にこたえて—	ジェイン・オースティンの娘たち—イギリス風俗小説論—	研究社出版, pp. 103-38; ルイスへの言及は pp.105-07, 135n1, 135n2, 136n3, 136n4.	
1984.12.10	昭和59	榎本みな子	オースティンからジョージ・エリオットへ	オースティンの小説とその周辺	英宝社, pp.235-59; 他にp.12でもルイスに言及	「ジェイン・オースティンとジョージ・エリオットを結びつける媒介としてジョージ・ヘンリー・ルイスのオースティン論を中心として見られる彼の小説観と, その特質, またその小説観から考えられる二, 三の問題とジョージ・エリオットの小説との関係を考察」(pp.236-37) したもの; 初出は『清水勇教授退職記念論文集』(1968.06.29) の「Jane Austen から George Eliot へ—G. H. Lewes の Austen 論を中心として—」(pp.91-107) 初出の論文とは異なり, 英文の引用文等がすべて翻訳されている
1985.02.28	昭和60		Lewes, George Henry (1817-78)	研究社英米文学辞典(第三版)	研究社, p.746.	1961年版と同一内容

日本におけるジョージ・ヘンリー・ルイス文献書誌

1985.03.10	昭和60	鶴見俊輔	女流作家とその「夫人」	『読書日録	潮出版社, pp.113-29; ルイスへの言及はpp.118-19.	初出は「文藝春秋」昭和58年6月号(1983.06.01) pp.278-81.
1986.02.15	昭和61		エリオット, ジョージ	キリスト教人名辞典	日本基督教団出版局, p.289.	「メソディスト派の信徒の家に生まれ……」という誤った記述あり
1986.04.10	昭和61	倉持晴美	第四章 ジョージ・エリオット: 考える女性	十九世紀英国小説—女性と結婚	荒竹出版, pp.89-121; ルイスへの言及はp.89.	
1986.05.25	昭和61	藤田清次	「IV リアリズムとロマンチズム」の中の「(三)」	イギリス小説概論—主としてエッセイ風に一	英宝社, pp.60-76; 他にpp.31, 63, 181-82においてもルイスに言及.	
1987.01.30	昭和62	佐瀬順夫	「VII. Victoria朝(1832-1900)」の中の「iii 小説」における「(e) George Eliot (1819-80)」	要説イギリス文学史(増補版)	英宝社, pp.137-39; ルイスへ言及はp.138.	初版(1969.08.20), 新版(1972.03.01); 増補版は20世紀の部分が増補されたもの
1987.03.20	昭和62	野町 二, 岡本通編著	「追補 III (未出作家)」の中の「(a) 第19世紀以前」における「George Henry Lewes」の項	英米文学ハンドブック(増補三訂版)	開文社, p.110-13; p.242でもルイスへの言及あり	増補三訂版(1987.03.20)では, 「追補 III (未出作家) BRITISH AUTHORS」の中の「(a) 第19世紀以前」において「George Henry Lewes」の項が追加されている
1988.04.10	昭和63	久守和子	「第六章 自己実現への道程—ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』」の中の「[George Eliot, 1819-80]」	松村昌家編『ヴィクトリア朝小説のヒロインたち—愛と自我』	創元社, p.184.	
1988.06.10	昭和63	瀧 勝也	「II 作家と作品」の中の「ジョージ・エリオット」	内田毅監修『英語・英米文学ハンドブック』	創元社, pp.148-53; ルイスへの言及はp.148.	
1988.09.01	昭和63	石塚虎雄		ジョージ・エリオット論	篠崎書林, pp.3, 14-17, 69, 85, 98, 101, 110, 122, 133-34, 136-37, 143, 154, 155, 157, 188, 189, 254, 288, 289, 312, 314.	
1988.09.25	昭和63	佐久間良子	三 フェミニズム	岡本靖正, 川口喬一, 外山滋比古編『現代の批評理論第三巻 批評とイデオロギー』	研究社, pp.129-52; ルイスへの言及はpp.134, 135, 138.	
1988.11.05	昭和63	鮎沢乗光	第四章 小説のキャラクターと細部: ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』	イギリス小説の読み方: オースティン, プロンテ姉妹, エリオット, ハーディ, フォースター	南雲堂, pp.118-48; ルイスへの言及はpp.121,130.	
1989.04.10	平成元	広瀬佳司		ジョージ・エリオットの悲劇的女性像	千城, pp.8, 160, 162, 163, 164, 167, 168, 169, 170, 171, 172.	
1989.07.01	平成元	松村昌家		ディケンズの小説とその時代	研究社, p.301.	
1989.11.20	平成元	内田能嗣		ジョージ・エリオットの前期の小説—モラルティエを求めて—	創元社, pp.20-21, 35, 131-32.	

1991.03.20	平成3	福永信哲		阿部史郎・阿部幸子・福永信哲著『ルネッサンス・太陽・革命』	恒星社厚生閣 pp.140, 141, 142, 174.	
1993.06.10	平成5	三ツ星堅三	「第7章 ヴィクトリア時代(19世紀)」の中の「道徳的人生観と心理解剖のジョージ・エリオット」	イギリス文学史概説—社会と文学—	創元社, pp.152-56; ルイスへの言及は p.153.	
1995.08.08	平成7	夏目金之助		漱石全集 第十四巻 文学論	岩波書店, pp.517, 696n五一七・9.	
1996.05.15	平成8	夏目金之助	人工的感興	漱石全集 第二十五巻別冊 上	岩波書店, pp.190-94; ルイスへの言及は pp.190, 523n一九〇・8.	
1995.10.25	平成7	福永信哲		絆と断絶: ジョージ・エリオットとイングランドの伝統	松籟社, pp.18, 21, 22, 32, 33, 43, 44, 45-54, 220, 255, 262, 280.	
1995.11.20	平成7	藤井元子		歴史と文学—ジョージ・エリオットの小説—	近代文藝社, pp.12, 23, 25-26, 44, 138.	
1996.10.30	平成8	廣野由美子		十九世紀イギリス小説の技法	英宝社, pp.24-25, 31, 37, 47, 391n37.	
1997.01.25	平成9	大島一彦		ジェイン・オースティン: 「世界一平凡な大作家」の肖像	中央公論社, 中公新書, p.19.	
1997.06.27	平成9	夏目金之助		漱石全集 第21巻 ノート	岩波書店, ルイスへの言及は pp.205, 239, 403, 722; <i>The Principle of Success in Literature</i> [The Scott Library] 中の "The Inner Life of Art" に言及	
1997.12.19	平成9	夏目金之助	「蔵書に書き込まれた短評・雑感」の中の「Lewes (G. H.): <i>The Principles of Success in Literature</i> (The Scott Library)」	漱石全集 第二十七巻 別冊 下	岩波書店, pp.193-98.	"The Principles of Success in Literature" 及び "The Inner Life of Art" への書き込み
1997.12.19	平成9	夏目金之助	「漱石山房蔵書目録」の中の「28」	漱石全集 第二十七巻 別冊 下	岩波書店, 「漱石山房蔵書目録」 p.18.	
1997.08.30	平成9	小泉 仰		J・S・ミル	研究社, イギリス思想叢書10, p.50.	
1998.10.20	平成10	山本節子		ジョージ・エリオット	旺史社, pp.11, 22, 35-36, 47, 49, 54, 159, 167, 203, 205, 209, 224, 229, 232, 252, 297, 298-99, 299-301, 307-09, 311, 315, 317.	
1999.09.27	平成11	亀井秀雄	第四章 作者の位置	「小説論」: 「小説神髓」と近代	岩波書店, pp.117-43.	ルイスの小説作法論『文学で成功する方法』(1865)への言及; 他に pp.2, 9にもルイスへの言及あり

日本におけるジョージ・ヘンリー・ルイス文献書誌

1999.11.05	平成11	佐々木徹	ブラドンの初期小説—『ジョン・マーチモントの遺産』を中心に—	松村昌家教授古稀記念論文集刊行会『ヴィクトリア朝—文学・文化・歴史—』	英宝社, pp.206-19; ルイスへの言及はp.210.	
2001. 04.21	平成13	足立万寿子	「第6章 シャーロット・ブロンテの死去と伝記『シャーロット・ブロンテの生涯』の中の「慰めと励まし」	エリザベス・ギャスケル—その生涯と作品	音羽書房鶴見書店, pp.220-26; ルイスへの言及はpp.223-24; この他に pp.246, 247 においてもルイスに言及	1857年4月15日付けのルイスからギャスケル宛ての手紙の抄訳を収録
2002.03.31	平成14	河内 司		英文学史 第19世紀の英文学とその社会思潮—世界文学とその社会思潮の展望—	富山房インターナショナル, pp.276, 340, 351, 474.	
2002.05.15	平成14	松本 啓	「XII 理想と現実の狭間—『ミドルマーチ』をめぐって」	中央大学人文科学研究編『埋もれた風景たちの発見：ヴィクトリア朝の文芸と文化』	中央大学出版部, 中央大学人文科学研究所研究叢書30, pp.539-71; ルイスへの言及はp.543; 後に『イギリス小説の知的背景』(中央大学出版部, 2005.09.05)に収録.	
2002.07.01	平成14		「Dr Williams's Trust and Library」, 「St John's Wood」, 「Strand」	蛭川久康, 桜庭信之, 定松正, 松村昌家, Paul Snowden 編著『ロンドン事典』	大修館, pp.229, 659-70, 742-44.	
2003.09.30	平成15	渡辺千枝子		ジョージ・エリオットとドイツ文学・哲学	創英社/三省堂書店, pp.64-65, 66-72; この他にも pp. 17, 18, 31, 32-33, 59, 62, 64, 64-65, 66-72, 158-59, 187-88, 189, 190, 192.	
2003.10.01	平成16	青山誠子		女たちのイギリス文学	開文社, pp.23-24, 83, 103, 104.	
2004.03.10	平成16	天野みゆき	「第八章 『ミドルマーチ』」の中の「1 G・H・ルイスとの対話」	ジョージ・エリオットと言語・イメージ・対話	南雲堂, pp.298-328; 他に pp.23, 55, 56, 76-77, 168-69, 290, 297, 375, 401, 402, 408-09.	
2004.07.15	平成16	石塚裕子	第4章 George Eliotと歴史と地中海	ヴィクトリアンの地中海	開文社, pp.99-128; ルイスへの言及は pp.108-09, 113, 119, 134.	
2005.02.25	平成17	荻野昌利		歴史を〈読む〉—ヴィクトリア朝の思想と文化—	英宝社, pp.200,204, 205, 206.	
2005.03.30	平成17	佐藤明子	なぜバベルの塔は完成されるのか?—『シャーリー』における言葉の問題—	日本大学イギリス小説研究会編, 『イギリス小説の探究: Explorations』	大阪教育図書, pp.23-43; ルイスへの言及はp.26.	
2005.03.30	平成17	原 公章	『ミドルマーチ』における「心筋縮小」と「心筋拡張」	日本大学イギリス小説研究会編, 『イギリス小説の探究: Explorations』	大阪教育図書, pp.1-21; ルイスへの言及はp.8.	

2005.09.05	平成 17	松本 啓	第10章 理想と現実の狭間—『ミドルマーチ』をめぐる—	イギリス小説の知的背景	中央大学出版部, 中央大学学術叢書 (60), pp.187-215; ルイスへの言及は p.191; 初出は, 中央大学人文科学研究センター編『埋もれた風景たちの発見: ヴィクトリア朝の文芸と文化』(中央大学出版部, 2002.05.15) 所収の「XII 理想と現実の狭間—『ミドルマーチ』をめぐる—」	
------------	----------	------	-----------------------------	-------------	---	--

注

- 1 調査の成果の一部は、すでに公表されている。以下を参照。拙論、「日本におけるジョージ・エリオット 文献書誌：明治・大正期（翻訳・書物編）」、『兵庫教育大学研究紀要』第28巻（兵庫教育大学，2006年3月）；拙論、「日本におけるジョージ・エリオット 文献書誌：明治・大正期（新聞・雑誌編）」、『兵庫教育大学研究紀要』第29巻（兵庫教育大学，2006年9月）；拙論、「日本におけるジョージ・エリオット 文献書誌：明治・大正期（新聞・雑誌編[続]）」、『兵庫教育大学研究紀要』第30巻（兵庫教育大学，2007年2月）。
- 2 笹淵友一、『「文学界」とその時代 下』，5版（明治書院，1981）507。
- 3 「譯者の序」において、「本書は英國文壇の一異彩たりし故リユーキス氏の著 "Some Principles of Success in Literature" の抄譯也」（p.1）と記されているが、訳者による解説文では、「著述の外に、彼れの事業として擧べきは『隔週評論』の創刊なりとす。……本書は其の初號以下に毎號掲載せられたる論文也」（p.293）と記されている。『Fortnightly Review』（『隔週評論』）に掲載されたルイスの文学論は "The Principles of Success in Literature" であり、「譯者の序」にある "Some Principles ..." は "The Principles ..." の間違いであろう。

なお、"The Principles of Success in Literature" は『隔週評論』の1865年5月15日号（創刊号）、6月1日号、7月15日号、8月1日号、9月15日号、11月11日号に連載された後、単行本として出版されている。長谷川訳が出版された1906年以前には1885年版、1891年版、1898年版、1901年版がでていたようである。1898年版は英国で、他の版は米国で、それぞれ出版されたものである。

これらの版のうち、1898年版（Scott Library版）にのみ、ルイスのもう一つの文学論 "The Inner Life of Art" が一緒に収められている。"The Inner Life of

Art" は、当初 "Philosophy of Art: Hegel's Aesthetics" と題して *British and Foreign Review* の1842年3月12日号の pp.1-49 に発表された論評の pp.1-40 までの部分を再録したものである。その英文タイトルの変更は、編者の T. Sharper Knowlson によるものと思われる。少なくともルイスが、その生前に、"Philosophy of Art: Hegel's Aesthetics" の最後の部分を削除して、"The Inner Life of Art" と題して新たに発表したものは、現在のところ確認されていない。（"George Henry Lewes 1817-78," *The Cambridge Bibliography of English Literature*, vol. 4 [Cambridge: Cambridge UP, 1999] 2550-52; George Henry Lewes, *The Principles of Success in Literature*, ed. Wm. Dallam Armes [[Berkeley]: University California Students' Co-Operative Association, 1901]; *The Wellesley Index to Victorian Periodicals 1824-1900*, vol. 2 [Toronto and Buffalo: U of Toronto P, 1972] 184-86; *The Wellesley Index to Victorian Periodicals 1824-1900*, vol. 3 [Toronto and Buffalo: U of Toronto P, 1979] 88 を参照。）

長谷川は、「詩とは何ぞや」に関して、「この一篇、英人リユーキス氏が「藝術の生命」と題し、英國文壇に審美學及び批評の振るはざるを慨し、其の軽んずべからざるを説き、又詩歌の何物たるかを論じたる所の大意を摘譯したる也」（p.339）と述べている。「藝術の生命」と訳された原文の英文タイトルが "The Inner Life of Art" であることは明白である。それゆえ、おそらく長谷川訳の『文學訓』は1898年版に基づいて抄訳されたものであり、長谷川は1898年版に収められている "The Inner Life of Art"（「藝術の生命」）をルイスが「題し」たものと誤解していたと言えるようである。

- 4 名著復刻全集編集委員会編『文學論』（日本近代文学館，1975）647。この復刻版は初版（大倉書店，1907）を復刻したものである。

5 漱石が所蔵していたのは1898年版 (Scott Library版) である。この本の書名は *The Principles of Success in Literature* であるが、本稿の注3で指摘したように、この1898年版には "The Principles of Success in Literature" と "The Inner Life of Art" の二編が収められている。漱石の「ノート」に抜き書きされているのは、いずれも "The Inner Life of Art" からのものである。

(『漱石全集 第27巻』[岩波書店, 1997] 193-98, [漱石山房蔵書目録] 18; 『漱石全集 第21巻』[岩波書店, 1997] 205, 239, 403, 722; 村岡勇編『漱石資料—文学論ノート』[岩波書店, 1976] 53, 76, 316, 412を参照。)